





158958

大文字大文字。如意嶽頭火色熾。此火四百五十年。年々歲々期不貳。孟蘭盆會送聖靈。磔羅衛衝光其位。西遊幾十回。每次失其次。今夕拜彼光真箇快心事。我揮椽大筆終生記文辭。身本無繕稿。馳騁尸如意。大文字大文字。如意嶽頭大文字。
と吐きし大氣焰は大火焰となり第宅書器一切鳥有是乃九月一日の震災にて火の起るを見るや他物は打棄て洋學年表と御鞏國史と
の稿本を抱出からうじて弟が根岸の宅に逃れ入りたりかくて家族一室に群居したれば筆硯に對するに由なく又七條工場も同しく
火災に罹れり於是空過二年今茲丙寅雙方從事する時期至り本表も世に布く事となりたり今齡八十二歲生命あるこそ不思議なれ
本表前後十年に涉るも一人の助手なく寫字校合總て老人の自力なり今世出版界は分業法となり著書者と發行者と各別なり余は發
行者に左右せられ理想通りの書を作る能はざるを欲せず製版費は自家より出金し書價は可成低廉として遍く世の需用に供せんと
冀ふ自費の事にしあれば損益は問ふ所にあらず今人より見ば一個の老愚物ならん孔子曰。其智可及。其愚不可及。
索引は第二稿成るの後に人名書名及物名等を抄録し貢數を付し小冊子となし置きは震災に持出し得ず焼亡してんげり本年に
至り更に抄録に筆としも老窮其煩穢に堪へずさりとて作らしむべき人事なし索引は骨の折れる業にて面白くなく而して油斷の
ならざるもの二ヶ月許にして整理し活版に付したれと差脱漏もあらんずらん請ふ怨せよ
回顧すれば舊本世行より五十年を経たり本年磐水府君百年祭遲延却と奇遇と迎ふ安名賢
大 横 修 如 電 謹 識

例言



九州帝國大學工學部

809768

1931年3月13

數學物理學教室

理学部 和 遡及
022132005000



九州大学蔵書

からず爾來増補訂正に思立ちし事數回ありしかど何時も障る事ありて其志を遂ぐる能はず
村に充つべき書籍に遇へば價を問はず購入れ見聞に觸れし事共は記憶し筆記し怠る事なし
の妻は弟文彦の女なり學士曰く洋學年表の增訂は如何伯父も高齢なり今の中に成稿せられ
べし決して彼是れ云はぬ曰くやういはれど材料に乏し故に誰れも手を着け得ずと
云すべし其書は何程ありや凡そ七八百種もありなんと問答ふ學士首を傾げ一閱するべ一
かるべしなどと談し合ひぬ爾時憶念す我にして斯事を成さずんは斯事竟に世に埋れな
れるは大正五年八月十七日此日余か誕辰にて満七十一歳而し其股稿せしは八年八月なれば
歴史と題する一書を草したりきかくて又本に反りて第二稿に取懸りしは九年十月なり
某事を掛く極て單調なる者とて徒に所用者の見出に過ぎずされば本表は少しく其態を易
に及び書物には解題を略記し雜事には旁證となるべき記事を添へ讀みても興味ある者に
べく又歴談隨筆などとしても見るべし是故に又一年餘を費し十年十二月一先づ稿を完す
一版は少くも三校を看ざる可らす老眼其勞に堪へず大字に自書し寫真鏡に縮寫して上板作
一條金屬版に謀りしに是非御引受いたなしとあり其事に定むされど又とみには筆とらず
にかゝり七月に至り本編一百三十餘頁を自書し了る少しく休養すべし京都に名高き大文字

名書記言

大觀如電修

大正十九年十一月
新洋文年表

九州帝國大學理學部
8790
物理學教室

8790

物理學教室

大正十五年十一月

九州帝國大學理學部
8790
物理學教室

新撰洋文年表

拔抄自在
但記書名

大観如電修

刊行也其前年丙子九月王父磐水五十年祭を修む此年表は其時に作り追遠の料にせしなり

からず爾來増補訂正に思立ち事數回ありしかど何時も障る事ありて其志を遂くる能はず
科に充つべき書籍に遇へば價を問はず購入れ見聞に觸れし事共は記憶し筆記し怠る事なし
の妻は弟文彦の女なり學士曰く洋學年表の增訂は如何伯父も高齡なり今の中に成稿せられ
べし決して彼れ是れ云はぬ曰くやりたい者はあれど材料に乏し故に誰れも手を着け得ずと
聞すべし其書は何程ありや凡そ七八百種もありなんと問答ふ學士首を傾げ一閱するさへ
しきるべなどと談し合ひぬ爾時憶念す我にして斯事を成さんは斯事竟に世に埋れな
れるは大正五年八月十七日此日余か誕辰にて満七十二歳而し其脱稿せしは八年八月なれば
史と題する一書を草したるに及ばず第二稿に取懸りしは九年十月なり

某事を掛く極て單調なる者とて徒に用所者の見出に過ぎずされば本表は少し其態を易
に及び書物には解題を略記し雜記には旁證となるべき記事を添へて讀みても興味ある者に
べく又史論隨筆などとしても見るべし是故に又一年餘を費し十年十二月一先^一稿を完す
版は少くも三枚を看ざる可らず老眼其勞に堪へず大字に自書し寫眞鏡に縮寫して上板す
一條金属版に謀りしに是非御引受いたしとあり其事に定むされど又とみには筆とらず
火は此道折衷し、見たる事なれば一見せばやと仲兒正二を携へて西京に赴きたり詩あり
大文字大文字。如意嶽頭火色熾。此火四百五十年。年々歲々期不貳。孟蘭盆會送聖靈。礎躍衝畫光其位。西遊幾十回。每次失其次。今
夕拜彼光。真箇快心事。我握椽大筆。終生託文辭。身本無繩糸。馳驅只如意。大文字大文字。如意嶽頭大文字。
と吐きし大氣焰は大火焔となり第宅書器一切鳥有是乃九月一日の震災にて火の起るを見るや他物は打棄て洋學年表と御壁國史と
の稿本を抱出からうじて弟が根岸の宅に逃れ入りたりかくて家族一室に群居したれば筆硯に對するに由なく又七條工場も同しく
火災に罹れり於是空過二年今茲丙寅雙方從事する時期至り本表も世に布く事となりたり今齡八十二歳生命あるこそ不思議なれ
本表前後十年に涉るも一人の助手なく寫学校合總て老人の自力なり今世出版界は分業法となり著書者と發行者と各別なり余は發
行者に左右せられ理想通りの書を作る能はざるを欲せず製版費は自家より出し金し書價は可成低廉として遍く世の需用に供せんと
冀ふ自費の事にしあれば損益は問ふ所にあらず今より見ば一個の老愚物ならん孔子曰。其智可及。其愚不可及。
索引は第二稿成るの後に人名書名及事物名等を抄録し頁數を付し小冊子となし置きしが震災に持出し得ず焼亡してんげり本年に
至り更に抄録に筆とりしも老齢其煩細に堪へずさりとて作らしむべき人も無し索引は骨の折れる業にて面白くなくして油斷の
ならざるもの二ヶ月許にして整理し活版に付したれど差勝股漏もあるんずらん請ふ恕せよ
回顧すれば舊本世行より五十年を経たり本年磐水府君百年祭遲延却と奇遇と迎ふ安名賢

大正十五年十一月

九州帝國大學理學部
8790
物理學教室

洋學年表

在日言名
大觀如電修

日本洋學年表は明治十年丁丑十一月の刊行也其前年丙子九月王父磐水五十年祭を修む此年表は其時に作りて追遠の料にせしなり故に倉卒の際とて遺漏も多く誤謬亦少からず爾來増補訂正に思立ちし事數回ありしかど何時も障る事ありて其志を遂ぐる能はず竟に其儘棄て置く姿となりにき然共材料に充つべき書籍に遇へば價を問はず購入れ見聞に觸れし事共は記載し筆記し怠る事なし一日中村文學士來り談此事に及ふ學士の妻は弟文彦の女なり學士曰く洋學年表の增訂は如何伯父も高齡なり今の中に成稿せられたしと曰く誰か爲る人あらん代てやるべし決して彼れ是れ云はぬ曰くやりたい者はあれど材料に乏し故に誰れも手を着け得ずとあらはは藏書切貸與すべし自由に檢閲すべし其書は何程ありや凡そ七八百種もありなんと問答ふ學士首を傾げ一閱するさへ二年はかかるらん今日の人はむづかしきるべしなどと談し合ひぬ爾時憶念す我にして斯事を成さんは斯事竟に世に埋れなしないで筆とるべしと第一稿を起したるは大正五年八月十七日此日余が誕辰にて満七十一歳而し其脱稿せしは八年八月なれば三裘葛に涉れり其間心氣一轉して御肇國史と題する一書を草したりきかくて第二稿に取懸りしは九年十月なり凡そ年表といふ者は某事某年に掲げ某年某事を掛く極て單調なる者とて徒に所用者の見出に過ぎざれば本表は少しく其態を易ふる事略より歿年齡を記すに解題を略記し難事には勞費となるべき記事には解説を略記し難事には勞費となるべき記事を添へ讀みても興味ある者にせんと筆したり一種の史略としても見るべく又史談隨筆などとしても見るべし是故に又一年餘を費し十年十二月一先づ稿を完すさて出版は普通活字版に付するなれど活版は少くも三校を看ざる可らず老眼其勞に堪へず大字に自書し寫眞鏡に繪寫して上板すべし此迄世人の餘りせざる事と思付き七條金屬版に謀りしに是非御引受いたしにとあり其事に定むされど又とみには筆とらず又一年を送りて十二年一月より淨書にかゝり七月に至り本編一百三十餘頁を自書したる少しく休養すべし京都に名高き大文字の火は此迄折あしく見たる事なれば一見せばやと仲兄正二を携へて西京に赴きたり詩あり

大文字大文字如意嶽頭火色熾此火四百五十年年々歲々期不貳孟蘭盆會送聖靈礎躍衝畫光其位西遊幾十回每次失其次今夕拜彼光真箇快心事我握椽大筆終生託文辭身本無羈絆馳驅只如意大文字如意嶽頭大文字如意嶽頭大文字と吐きし大氣焰は大火焰となり第宅書器一切烏有是乃九月一日の震災にて火の起るを見るや他物は打棄て洋學年表と御肇國史との稿本を抱出からうじて弟が根岸の宅に逃れ入りたりかくて家族一室に群居したれば筆硯に對する由なく又七條工場も同様に火災に罹れり於是空過二年今茲丙寅雙方從事する時期至り本表も世に布く事となりたり今齡八十二歳生命あるこそ不思議なれ本表前後十年に涉るも一人の助手なく寫学校合總て老人の自力なり今世出版社は分業法となり著書者と發行者と各別なり余は發行者に左右せられ理想通りの書を作る能はざるを欲せず製版費は自家より出し金し書價は可成低廉として遍く世の需用に供せんと冀ふ自費の事にしあれば損益は問ふ所にあらず今より見は一個の老愚物ならん孔子曰其智不可及其愚不可及

索引は第二稿成るの後に人名書名及事物名等を抄録し頁數を付し小冊子となし置きしが震災に持出しえず焼亡してんげり本年至り更に抄録に筆とりしも老軀其煩細に堪へずさりとて作らしむべき人も無し索引は骨の折れる業にて面白くなくして油斷のならざるもの二ヶ月許にして整理し活版に付したれど差違漏誤もあらんずらん諸ぶ恕せよ

回顧すれば舊本世行より五十年を經たり本年磐水府君百年祭迎延却と奇遇と迎ふ安名賢

引
索
——
朝
引

丁

一

洋學年表索引	了
青木昆陽	三七四七、四八、五
青木興勝	五六、六三、六四
青木周弼	一七二
青地林宗	九、一〇七、一〇八、一〇九
青山忠祐	二六、二七
足利義時	一
足立左内	一〇八〇、一〇八一、三
足立長雋	六
足立榮建	二六
足立寛	一五〇
赤井東海	二九
赤沼庄藏	一四三
赤松大三郎	一七四
赤根小三郎	一五
淺井村石	五
淺野中務	一六
淺野敬徳	一三九
阿部將翁	一四〇、一四一、五
阿部櫻齋	一二、一四六
阿部正弘	一四四
荒木彥四	一七二、三
荒井庄太郎	一六
安宅九	八九
石井謙道	一五六
朝比奈甚五	九三
朝野北水	九七
嵐山甫安	一八、五、九
新井白石	二九、三四、三七、四二
鮎川昌行	三四
鮎部正庵	六
麻田剛立	六、五、六〇
安部龍平	九、三四
相澤才助	三九
眞宗八	一四〇
亞歐堂	六
アタムス	四
アントリウクレエル	三
亞細亞略說	六
伊東玄朴	一〇七、一〇八、二六、二〇
伊東貞齋	四〇、四五
伊東玄伯	四五、四七
伊藤圭介	一〇六、一〇九、一二〇、一二七
伊藤慎藏	一四、一五
伊藤修三	一四
今村四郎	一六、三、三四
今村市兵	三七四三、四五、五、五
今村明生	一五、六
今村大十郎	一七
今村金兵衛	一七
市川梅顥	一七
市川左近	六
市川齋宮	二三、三四
市野金助	一五
稻村直家	一四三
稻生若水	三
稻村三伯	七八、七八一
稻富直家	一四三
井口當範	二七
井戸對馬守	三九
井伊直弼	一四五
猪股傳兵	一一
猪股昌永	一〇
猪飼豊次郎	三、三七、四、五
醫戒	三四
天草島	二
天草一揆	一〇
陶士	六五
會津西洋學館	一四二
秋田醫學校	二五
石塚崔高	一七
石塚汝上	二九
石坂宗哲	一〇、三五
石坂惠甫	一〇九
油繪	一〇八
繪具	一〇三
旭丸	一四一
石坂錄郎	一〇三
石黒恒太郎	一五一
石黒正敏	一三〇
磯吉	七六
板倉内膳	一〇
饭沼惣齋	三、三三
五十嵐基德	二七
入澤恭平	一七
井上正繼	四九、三
井上篠後	一六、三
井上大夫	一九
井上春洋	一三
井口當範	二七
井戸對馬守	三九
井伊直弼	一四五
猪股傳兵	一一
猪飼昌永	一〇
岩瀬彌十郎	九四
岩瀬肥後	一四三
岩瀬昌昌	四
岩瀬善兵衛	六、六六
岩崎灌園	二三
礎永孫四郎	三七六
礎永周經	八七
礎吉	七六
板倉内膳	一〇
池田義之	一六
池田啓太	三三、三三、三三
石橋助左衛門	三三、三三、三三
石橋莊助	二
石橋政方	一四五
岩永玄昌	四
岩瀬彌十郎	九四

1

沿海實測錄

醫範提綱	二三	石火矢臺	一五二
醫原樞要	二七	異國草木會	二三〇
醫學集成	一三	伊能沿海實測	八五六、六七 八六九、九五
醫方研幾	一六	江馬蘭齋	大六八
醫療正始	一〇	宇田川槐園	六三九、七九
醫療精義	一〇	宇田川椿齋	六三九、六二七
醫家必携	一四	宇田川榕庵	一〇四
醫宗玉海	一四	宇田川興齋	三二三、四一
醫事雜誌	一五	宇野蘭齋	一三
伊曾保物語	二二、七三、五五	宇都宮三郎	一七四
伊能流量地傳習錄	一五	上杉孝伯	一五〇
英吉利文典	一四二、四六	上田亮章	一三六
一角考	一五	上野彥馬	一四七
印度志	九	内田觀齋	一〇七、一九、二三
異國往來記	一元	英米對話捷徑	一四
因波發微	八五、一〇	英文箋	一四五
夷情備文	三元	英國單語編	一四八
醫學八科	一三三、二四、三	英國步兵練法	一五
醫學所	一四八、五五	英文熟語集	一五
醫學會	一五	鈴製活字板	一三
英吉利	四五、三	江戸ハルマ	一八
英吉利語	九四	江戸尺	一七六
印度總督	三三	江戸地圖	一七六
イスタラヒ	三三	牛込忠左	一三
浦賀奉行	四〇	浦野元周	一〇
浦賀砲臺	二六	海上隨鷗	七八九五
雲寸加留多	五五	江戸の風	一三
蝦夷地實測	五五	永祿寺	一四〇
瀛環志略	一四	沿海實測	一九
蝦夷地實測	一四	鉛製活字板	一三
江戸英龍建築	三四	小野蘭山	一三
大樹磐里	六五、九九	奥平昌高	一九五
大樹磐水	六五、九九	奥田有益	一五
エレキナル	六三	小野友五郎	一四〇、一六
オコ	小野田武助	一六六	
オコ	小野寺丹元	一〇六、二四、一四	
オコ	小野寺謙治	一四一	
オコ	小寺澤鱗介	一九七	
オコ	小寺弘	一四三	

索引

小川正意	三三	阿蘭陀油取様	三三
小栗上野介	一四九	阿蘭陀馬書	四五
小山杉溪	一五五	阿蘭陀本草和解	五一五
岡泰純	一九三	阿蘭陀地圖略說	五五四
園研介	一〇九、二五七	阿蘭陀絕語和解	九九
岡本三右衛門	三	阿蘭陀砲術秘書	九四
岡本博鄉	一四五	阿蘭陀辭蠻語箋	一五五
岡田宗立	一七一	桂川甫策	一五三、七四〇、五五
岡崎彌兵衛	一四	桂川甫齋	一七一
岡村源吾兵衛	一五	桂川甫賀	一七〇
岡内草平	一四	桂川甫周	一四五
緒方春朔	一〇〇	賀島近信	一三〇
緒方洪庵	三八、一三三、二四一、四三	賀季風	一三三
緒方郁誠	一二七	勝田季鳳	一〇七
緒方洪哉	一四五	勝海舟	一三〇、四〇
荻野喜内	一七	神田寛甫	一三三
荻野元侃	一六四、九	合田剛	一四六
大坂解剖社	一七	各務文献	九五、一〇四
大筒役	一六	片山圓然	一〇四
大森大筒丁場	一三七	角屋七郎	八七
大野藩醫學館	一四一	河田貞賴	一三四
河合良作	一五	河口信任	一六四
河野禪造	一四	耕鉄堂	一大六六
笠原良策	一三四	カヌバル	一五
香山道太郎	一五三	海國兵談	一七一
解屍編	一四	解剖訓蒙	一五四
眼科精義	一八二	解剖存真圖	一〇七
眼科新書	一〇〇	解剖圖譜	一〇七
眼科錦囊	一四四	解剖圖說	八三
眼科新編	一四五	解臓圖賦	一〇六
眼明辨	九五	解屍圖	一四
俄羅斯雜話	九〇	解剖圖	一〇六
俄羅斯板輿地圖	一〇六	解剖圖	一〇六
航海新圖	一四〇	俄羅斯船輿地圖	一〇六
開方盈肭	四四	俄羅斯船輿地圖	一〇六
開化新聞	一四四	俄羅斯船輿地圖	一〇六
金森建策	一四	海外新話	一三五
小笠原島	三一四	海外新聞	一四九
阿蘭陀外科指南	三	海內醫林傳	一三
阿蘭陀外正傳	一元	解體新書	一五五、六三
歐州遣使	一四六	解剖圖	一〇六
加藤丸郎	一三九	解剖圖	一〇六
金子半七郎	一三三	解剖圖	一〇六
加藤枝直	一四七	解剖圖	一〇六
御跳軍艦	一四〇	解剖圖	一〇六
御跳軍門	一七二〇、六	解剖圖	一〇六
加福喜藏	一四七	解剖圖	一〇六
大槻磐水追祭	一五七	解剖圖	一〇六
オクダント	一八三	解剖圖	一〇六
阿蘭陀風説書	一三三、四四	解剖圖	一〇六
阿蘭陀外正方良	一三	解剖圖	一〇六
阿蘭陀外科書	一七	解剖圖	一〇六
阿蘭陀外正傳	一元	解剖圖	一〇六
阿蘭陀外科指南	三	解剖圖	一〇六
金森建策	一四	解剖圖	一〇六
海岸砲術備用	一九三	解剖圖	一〇六

九

索引